

〔巻頭言〕

本学紀要の価値

機能看護学講座教授 奥井 幸子

本誌の刊行も7冊目となる。本紀要の価値はどこにあるのか。以下二点について述べたい。

第一の価値は、その独自性についてである。大学界における紀要の位置づけは、芳しいとはいえない。若手教員の育成用、または専門学会誌投稿未満のもので研究業績としてのポイントは低いと聞いている。

本紀要は、レベルの差でなく、内容の差で勝負したい。

本学の建学の精神である看護の質の向上を実践家とともに協働する、これを通して本学の看護学を確立する、さらに看護職の生涯にわたる成長・発展に資する、これらに対する説明責任、結果責任を果たす内容としたい。

独創的な四大講座制による大学運営には、試行錯誤や、特に冒険が必要である。そのためには、他専門誌の規則や枠では表現しきれない、しかし、価値のあるものを公表していく。時には、貴重な失敗例の報告もあっていいのではないかと、個人的には思っている。一般的にいわれるのは、独創性を発揮する人は、とかく慣習やルールにはまりきれないことが多い。

看護は“実践が命”と信じているが、それを実践家とともに実行する大学、そのために行う具体的な活動、すなわち、看護基礎教育、それ以降の生涯教育、実践家と協働して看護の質的向上を目指す共同研究が本誌の内容の主要部分になっている。

私が査読で心がけてきたこととして、あまりこまかい、うるさい注文はつけないようにしてきた。本学へ赴任して、はじめて大学の教員になった若いメンバーが多い大学である。研究論文は、書くことを始め、長期にわたって書き続けることが大切である。査読のコメントで書く気を削ぐことはしたくない。明らかな誤りを指摘し、論文や研究がよくなる

ことを願って意見を付すにとどめてきた。本学の教育や研究が発展し、教員も経験とともに成長することにより、本誌の質も上っていくに違いない。その経緯を長い目で見ていたい。

第二の価値は、本学の歴史を語るものとして、後日に発揮される価値である。

月日がたち、人は去り、文書は散逸しても創刊号からの紀要は残る。大学運営が低滞したり、混迷に陥った時、また個人が同様な状況になった時、建学の精神という初心に立ち戻ることができる。この大学の存在する理由、教育・研究方針、実践家との協働、これらの why, what, how to を問い続けることが重要である。

私個人の体験として、1970 年前後、NTT で成人病管理が定着した頃、why, what, how to に深刻な疑問が生じ、プロフェッショナルとしてのアイデンティティクライシスに陥ったことがある。本社へ行って、保健婦活動に関する公文書を年代順に見せてもらった。結核管理の成功には、結核を制御したい、結核患者を助けたいという保健婦のひたむきな真剣さ、熱い心、暖かい手が紙面から伝わってきて、深い感動を覚え仕事を続ける力を取り戻した。と同時に上からの指示を誠実に実行し、自分たちで主体的に看護を創り出していくという姿勢は読みとれなかった。ここから学んだことは、自分たちの看護は自分たちで創っていく以外に方法はない。why, what, how to を実践しながら問い続けていくことが必要不可欠であるということであった。

違いで勝負する時代に、他大学や社会・世界の動向を知るとともに、開学当初の教員たちがどのような大学を創ろうと努力したのかを想い、大学の現状を検討し続けてほしい。その時こそ、本紀要が、最も価値を発揮するであろうことを期待したい。